ご自身の模範に従うよう弟子を教える

ヨハネ福音書13:12-20

【新改訳 2017】

13:12 イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。

13:13 あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。

13:14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。

13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。

13:16 まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりません。

13:17 これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。

13:18 わたしは、あなたがたすべてについて言っているのではありません。わたしは、自分が選んだ者たちを知っています。けれども、聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。

13:19 事が起こる前に、今からあなたがたに言っておきます。起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。

13:20 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

【祈りながら考えよう】

（１）教えの順序はなぜ重要なのですか。

（２）「互いに足を洗い合う」という実物教育の模範の意味を、聖句に基づいて説明して下さい。

（３）20節のことばはなぜ語られたのですか。

【解　説】

（１）教えの順序は極めて重要である

イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。

「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。（12節）

主イエスは、この地上の生涯の終わりが近づいていることを知られ、弟子たちと一緒に取った夕食の席の途中で立ち上がられ、弟子たちの足を洗い始められた。びっくりして、足を引っ込めようとする弟子たちに、そのことの第一義的な意味を説明され、「**わたしがしていることは、今はあなたには分からないが、あとで分かるようになります**」と言われて、いくらか象徴的にこの出来事が、人を罪からきよめることを指していることを暗示された。

この主のなさった事は、何であるよりも、罪から私たちを救ってくださる救い主にしか出来ないことであるということを教えられた。

そのことの上に、主は次の意味を教えておられる。この順序は極めて重要で、聖書が私たちに一貫して教えていることである。

この順序を無視し、特に第一の意味をいい加減にして、キリストはどうなさったか、そして私たちもそれに倣おうという教えは、非常に美しく魅力的ではあるかもしれないが、絶対に人を救うことの出来ない似て非なるキリスト教である。それは、キリストを偉大なる教師としてしか見ていないもので、罪からの救い主としてのキリストを受け入れない異端の教えでさえある。

（２）弟子たちがするための模範を示す

主は、弟子たちの足を洗われると、上着を着けて、また元の席に戻られ、こう言われた。

「**わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。**」

この主の御言葉を文字通りに解釈して、実際に足を洗い合うことを実践して人々がいる。それは、ローマ・カトリック教会においてである。6世紀頃に生まれたベネディクトゥス会の修道院の規則にはこれが入っている。

はたして、主はこのようにお互いに足を洗い合うことを実際にせよとおっしゃったのか。それは、主が次のように仰せられた御言葉がその判断の助けになる。

「**わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。**」

主はここで、「わたしがあなたがたにしたと同じことを、あなたがたもするように」とは言われずに、「**わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように**」（you should do as I have done for you/英訳）と言われた。

つまり、主はご自分がなさったと同じことをせよと仰せられたのではなく、ご自分がなさったとおりに弟子たちがするための模範を示したのだと言われた。

それでは、主がなさったとおりに弟子たちにもするようにと示された模範とは何か。先生であり主である人が、弟子の足を洗ったことの意味である。当時、人の足を洗う仕事は、奴隷のする仕事であった。先生であり主である人が、奴隷のする仕事をしたということである。当時、この仕事は最も卑しい仕事で、前回学んだように、奴隷でもユダヤ人の奴隷はしなかったほどのものであった。それすらも主はここでしておられる。この身を低くして他人を助けるという謙遜と愛の実行を意味していると理解すべきである。

「**あなたがたの間で人の先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。**」（**マルコ10:44**）

この主の命令の実行は、真のキリスト信者の集まりの中に、絶対に欠けてはならないことである。私たちは、私たちのためにご自身を捨ててくださった神の御子を信じていると告白している集団である。その私たちが、高慢になって、人を見下すようなことはあってはならない。主イエスに倣って、人の足を洗う者、すなわち謙虚な心を持って主のしもべとして皆に仕える者でありたい。

（３）愛の表れ

この足を洗うという仕事は、愛の表れである。ヨハネは、主が弟子たちの足を洗うという出来事を記すに当たり、

「**世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。**」（**13:1**）と書いて、

その実例としてこの出来事を記している。

またこの章の後の方で、主は、足を洗うということを、愛するという言葉で言い換えて、次のように教えておられる。

「**わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」（13章34節）

だから、ここで主が教えておられる実物教育は、私たち主の弟子たちが主に倣って、謙遜に愛を持って仕え合いなさいということであった。

もう一度繰り返して言うと、キリストの身代わりの救いということの上に、この教えがあるということである。へりくだって互いに愛し合うことができるのは、キリストの救いの恵みにあずかった者だけである。自分が神の前にいかに罪深い人間であるかを示され、へりくだらされることなしには出来ない。罪深い自分をも愛される神の愛に感動し、新生した者でなければ不可能である。生まれながらの人間に、このようなことを要求することは無理なことである。

主がここで教えておられることは、主の弟子たち同士の間では、常にへりくだって互いに愛し合うことが行われるべきだということである。主はさらにこう言われた。

「**まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりません。これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。**」

ここで、「**遣わされた者**」とは、他の個所で「使徒」と訳されている言葉である。ここで主に足を洗ってもらった者たちは、使徒であり、遣わされた者にすぎない。その彼らが、彼らをお遣わしになった主にまさるわけではなく、しもべとして足を洗ってくださったお方が、実に彼らをお遣わしになった方なのである。そこのところが本当によく分かって、主がしたのと同じ愛の奉仕を謙遜にする人は、主から大きな祝福を頂くことができるのである。

（４）ご自身が裏切られることを明らかにする

「**事が起こる前に、今からあなたがたに言っておきます。起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。**」

主イエスは、イスカリオテのユダが、最後にはご自身を裏切ることを知っておられ、あえて弟子のひとりにしておられた。それは、詩篇41篇の預言が成就されるためであった。

その理由は、主イエスの十字架の死が、神の予定外の出来事ではなく、神の力不足で、御子を守ることができなかったからとか、ユダヤ人の心を善導することができなかったとかというのではなく、全て神がご計画されたことであり、事は全て、神のご計画通りに運ばれたのであることを、全ての者に示すためであった。（**使徒2:23**）

主は前もってご自身が裏切られることを弟子たちに明らかにされた。実際そうなった時に、イエスが真に神たるお方であったことを弟子たちが知るためであった。「**わたしが『わたしはある』であることをあなたがたが信じるためです。**」

新約のイエスとは、旧約の主（ヤハウェ）である。このように、成就した預言は、キリストの神性を証明する素晴らしい証拠の１つであると同時に、聖書の霊感をも証明している、と言ってよい。

（５）主が遣わした者を受け入れる者は、主を受け入れること

主は、さらにイスカリオテのユダの例外を除外して、こうも言われた。

「**まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。**」

主ご自身が裏切られる結果、他の弟子たちがつまずき、疑いに陥ることが主にはわかっておられた。そこで、この励ましのことばを付け加えられた。弟子たちは神からの使命を帯びて遣わされることを忘れてはならなかった。主とほとんど「一体」とみなされる弟子たちが受け入れられるのは、主が受け入れられるのと同じであった。（**使徒9:4**）

また、キリストを受け入れる人は父なる神を受け入れたということであった。このように、弟子たちには、御子なる神、および父なる神との「密接なつながり」という慰めが用意されていた。